

定九郎

泉鏡花作

—

「まあ、よくお似合ひなさいますこと——

ほん、ほんにお輕さんのやうでございますよ。」

と恚う言ふ。

「……と恚う言ふのは、綠温泉、碧流館の、

亭主が自慢の年若な女房で、内證で女中等には奥さんと呼ばせて居る。」

「まあ、よくお似合ひなさいますこと——

ほん、ほんにお輕さんのやうでございますよ。」

と其の女房に、恚う言はれる。

「……と恚う言はれるのは、新橋の野菊と言ふ、容色で評判の若手の藝妓で。」

場所は其の温泉宿の大式臺を出た、樹立のむらもみぢした中に、就中燃立つばかり色を染めた一株の

楓の下。——野菊は、名所めぐりの山駕籠に、

島田鬻の項をや、斜に、ト柔かな膝をふつくりと乗

つて、軽く膝を立て、白い足袋の爪尖を落雁のやうに友染の蒲團に浮かして、大輪の菊を中形の如く白く抜染めにした緋縮緬をちらりとからめて、袖をしつとりと沈めながら、駕籠から地摺れに垂れて居る。

此の景色は一寸好い。

女房は、成程亭主の自慢だけある。揉上の長い、濃くて艶のいゝのを圓鬘に結つた、ぽつとりと色の白い、睫毛の長い、肌理の細い、中背で、下ぶくれの、眉の優しい、目のぱつちりして、少し潤澤のある、睫毛の長い、年紀は二十六七で、お艶と言ふ、東海道の某宿に昔の本陣、今も時めく大旅館の秘藏娘が、生命がけで慕はれて、此の温泉宿へ縁附いたと聞く。

客を送出す挨拶に、不斷着の大島お召に、一寸三ツ紋の黒縮緬の羽織を引掛けたが、天は晴れたり、山は澄む、白い膚が透通るばかりで、塵をも据ゑず、水が垂りさう。いや／＼、ふつくりとしたのだから、甘い露がこぼれさうに見える。

唯、ちら／＼と、二葉三葉、掃清めた玄關前へ散りかゝるもみぢが、羽織の肩に、背に、落ちも留まらず、はらりと掛つて、下へ散るので、友染を地に敷いて、すつと立姿の風情がある。

此の景色は一寸好い。

で、ふつくりと、其の蒼んだ口元で莞爾して、

「まあ、よくお似合ひなさいますこと　ー

ほ／＼、ほんに、お軽さんのやうでございますよ。」  
と、其の野菊の乗つた、山駕籠の屋根へ、軽く白  
い手が掛ると、駕籠屋が、揃つて、息杖をトンと上  
げた。

野菊の帯の錦がすつと浮いて、袖の靡くこと二三  
尺。

續いて、おなじ駕籠が四挺　ー　たとへば野菊  
の一瓣として、ちよん／＼と梅鉢形に控へて  
居たのが、もろともに、二四が八人、八本の息杖を  
トン／＼と、杖に裂皮もなくきれいに上げた。

「行つていらつしやいますし。」

と、女房も女中もともに、言葉の数も、ちり／＼

ゝに、もみぢの葉の數。

駕籠が此の廣い式臺前を、妙にせばめて、一列に  
細長く並んだのは、やがて岨道、九十九折を行く心  
構に、豫め氣を籠めたものであらう。

「お靜に。」

野菊を眞前に、麓と言ふ女優扮装の髪を眞中から  
分けた藝妓が續いて、三挺目の駕籠に悠然と胡座し  
たのは、伯爵の家に婿君と成つた、紀川と云ふ、  
×大學出の法學士。・・・温顔に微笑して、腕  
をゆつたりと拱いて、雲を踏んだやうに乗つて通る。  
勿論、一行の御前、檀那なのである。

「行つていらつしやいました。」

莞爾として、伯爵が、

「顔世さん、内の由良之介はまだかね。」

「あれ、ほゝほゝ。」

とお艶が、手を乳のあたりへ、白くふつくりと上  
げて、媚かしい胸で笑つた時、腰を屈めて、うつむ  
いた、中でも年増の女が一人、とぼけたやうに、鼻

と眉毛を一所にもたげて、

「まだ東京でございます。」

トタンに出た。……第四番目の駕籠なるは、  
故と白粉を嫌つて、色も服装も淺黒い、きりゝとし  
た……但、指にも髪にも、寶石の光を見せた、  
紅玉、緑珠の數も七つ、名もお那々と云ふ、即ち伯  
爵の持もので、

「お寂しいでせうね。」

と、通つた鼻筋を、一寸横に向いて行く。

揃そろつて息杖いきづゑはトン／＼と……もみぢの錦にしきに、  
 梭をさを投なげるやうである。

五挺ちやうめ目の殿しんがりに、縞しまも上下うへした銘仙めいせんの、それも綿めん入いりらし  
 い、茶ちやの鳥打帽とりうちぼうを被かつた――駕籠かごに膝ひざばかり押おし  
 立たてつて、胸むねの挫ひしけた、肩かたのすぼけた、顔かほの長なが  
 い……餘計よけいに鼻筋はなすぢの通とほつた男をとこが、――最も  
 うカタ／＼と、敷石しきいしの上うへを褸つまも色いろめいて眞先まっさきに引返ひきかへ  
 す。其そのお艶えんの袖そでに、折をりから散ちりかゝる木この葉はもな  
 く、打うちまがふ砧きぬたの音ねもなしに、トンと息杖いきづゑの、袖そでと  
 摺すれ違ちがふ時とき、白しろい目めして、ぎよろりと紅あかい背負揚しよひあげを  
 鋭とく見みた。

此この男をとこが、事件ことを起おこした。

天上てんじやうの星ほしでも、人間にんげんの團栗どんぐりでも、數かずがあつて勘定かんぢやうすれば、其その中なかの一つには相違さうゐない。間違まちがひのない名なをつけた　　―　　渠かれ　　―　　其その男をとこは、其き一いちと稱とふる俳人はいじんである。

我わが戀こひや口くちも吸すはれず青鬼灯あをほくづき  
 凍こごえ來きし手て足あしうれしく逢あふ　　夜よかな  
 きぬノ、　　に犬いぬを拂はらふや袖そでの雪ゆき  
 身みをおもへばいなする蚊帳かやの螢ほたるかな  
 楊貴妃やうきひや踏坡たたびまでぬがすたいこもち

(其角きかく、嵐雪らんせつ、言水ごんすゐ、來山らいざん、几董きとうの句借用)

うはさを聞きくと、皆みな恚いかう云いつた句風くふうださうである。  
 其その適否てきひは編者へんしやも知しらない。

しかし、こんな事ことばかりで、いま時飯ときめしに成ならないのは誰たれが見みてもすぐ分わかる。其き一いちは、深川冬木邊ふかがはふゆきへんの一ちよ寸つとした家作持かざくもちの家いへに生うまれた若旦那株わかだんなかぶである。が、父ちち

親が、いゝ加減、氣樂人だつた處へ、其の亡く成つてからは、甘やかす母一人で、勝手に怠け出して爲たいまゝ好きなの道の風流三昧。近頃は此の風流に、種々煩しい意義を着けて論ずるけれど、朝寝と宵張が第一義だから、要するに勤勉な仕事ではない。遊び癖のついた處へ、酒と女が加はつたのでは、古今身代の持てやう筈はない。

名だけでも、うまれた町内の、天女にゆかりのある、牛込辨天町の裏長屋へ、年とつた母じや人とゝもに逼塞して、自分が稼人であるから、なまけ朋達の蔓を手繰つて、娯樂雜誌へ安原稿を書いたり、焼直しものゝ脚本を手傳つたり、つゝめでに樂屋へ入込むだり、稽古場の隅で辨當にありついたりして居たが、生活の苦しい中にも、此の年の夏は殊更に悲惨であつた。

饑飢さが、犇々と身に沁みると、極樂トンボでも知つた暢氣なのが、何うやら我ながら氣が狂つて居さうに思はれて、へゝんで、貧乏を嘲笑ふのが、底氣味の悪いくらゐと成つた。――



生命の糧の、米屋の催促は巖しいが、全世界の交通機關で智識と文明の普傳を天職とする靈の糧であるだけに、新聞の催促には幾分の容赦がある。

――或朝、六月ばかり勘定の滞つて居る某新聞を、目が窪んで鼻ばかり尖つた長い面を呼吸づかひとともに掬つて覗くと、緑温泉に避暑中の紀川伯の劇談と云ふのが、二段半に跨つて載つて居た。

――前段に山駕籠の第三番目に記したのが即ち此の伯爵である。――

伯爵は姫路邊の出生であるが、所謂江戸趣味の理解者で、某大學へ通學するのに、下町の然も深川に雇婆を使つて自炊をして居た。・・・其一は其の頃、町内の銭湯で、馴染に成つた朋達であるが、――後に大學を出てから、華族の姫君に想はれて、其の戀婿と成つてからは、とかくして十二三年、交際が途絶えて居た。

新聞を視た時、其一は、ぶる／＼と手が震へて、目が眩んだ。――土龍が太陽を仰いだやうであ

る。

「遣切れない。．．．．．いくらか借りてえもんだなあ。」

道具裏を彷徨つて、悪くすると、仕出しに出兼ねない男だから、獨言も臺辭じみて、ドタリと仰向けに成つて頭を抱へたが。

閣下　　ー

と稱へて、親展を奉つた。．．．．．曰く、小生も聊かながら劇道にたづさはり候もの、參上いたし一席の御高説を承りたい、と言ふのである。

意氣な若殿で、

閣下は皮肉でございますね、裸體でお目にかゝりたい、手拭をぶら下げたておいで下さい、と返事が來た。

七歳と三歳の女の兒、いや、お姫様が二人、きれいなお小間使が二人、　　ー　　夫人は一所でない。

　　ー　　其の一行であつたが、小兒があつて煩いか

ら、と座敷も別に整へてあつた。以ての外の厚遇で。

一夜を過ごした。翌日、其一のために催された名

所巡 ー 七月の中旬であつた ー 其の時、

山駕籠が同じく五挺。

三歳になるのは小間使が抱いて乗つた。が、眞先の駕籠には、七歳のお姫様が一人。雞壇から抜け出したやうに見えた。

紫陽花の碧い影が、薄靄ととも深緑の樹蔭に流れて、朝露は玉をちりばむる。

山鶯が啼いた・・・二聲三聲。

此の景色は一寸好い。

八歳のお姫様の駕籠の傍に、さて、宿の女房のお艶が媚しく立つたのである。

此の景色は、一寸好い。

「まあ、よくお似合ひなさいますこと ー

ほん、ほんにお軽さんのやうでございますよ。」

#### 四

却説、二度目に山駕籠が五挺、おなじ數で揃つたのは、同じ年十月初旬の事で、藝妓たちは三人とも、何う言ふ意味でか、皆錚々たる者で、家に居ると、姐さんとは言はない、お嬢さんと呼ばれる連中ださうである。

其の日は、もみぢに、灌に、峰を越し、谷を涉り、巖を攀ぢ、林を分け、里の湯で中休をして、やがて溪川に添ひつゝ、橋を幾つか渡つて歸つた。

「お庇さまで、お兄さん。」  
「おかげさまで、お兄さん。」  
と野菊と麓が、一寸更つて、揃つて慇懃に手をついた。

「いや、御苦勞でした。」  
「いゝ樂みをいたしました。」  
と言つたお那々の態度が、二人と一寸違つて居るのは言ふまでもなからう。

一時、酒が榮えて、やがて臥床を設くる時、昨夜の通り……十五疊へ二つ、二十五疊へ三組、間の襖を開いて、枕と枕を並べたのであるが、少し其の以前に伯爵へ電話が掛つた。卓上で聞き取つて、

「……其一人さん、浮世の義理です、明早朝一寸歸ります。貴方は何うぞ……否、私もまだ遊び足りないのです。明晩と思ひますが、何うですか、明後日は屹度引返します。御迷惑でもお残り下すつて、茶目連のお取締を願ひます。」

それからお那々に、  
「朝は皆が寢て居るうちに出掛けるからね、お前さんが起きたり、送つて出たりすると、おつきあひが出来て困るよ。野菊ちゃんなんざ、中でも寢坊なんだから……」

「ふふふ。」「  
「いゝかい、必ず起きつこなしたよ。」

其一の目の覺めた時は、もう女中の給仕で、伯爵は電燈の下で朝餉を認めて居た。

厚衾あつふすまの並ならんだ裡うちに、絹きぬの長襦袢ながじゆばんの細ほそい肩かたが、目覺めざめた花はなのやうに、ひら／＼と搖ゆれるのを、片手かたてで壓おさへて、

「起きないで／＼。」

女中ぢよちゆうを先さきにすつと立つ。

「やあ、お出掛でかけ。」

と其一きが言いつた。

「其そのまゝ／＼。」

少時しばらくすると、式臺しきだいに霧きりを拂はらつた自動車じどうしゃの響ひびきが起おこる。

二間殆ど一杯まいほとんばいに、いづれも緞子どんすの、朱しゆと、淡紅とんきと、薄うすい黄きと、緑みどりと碧あをと、時ときの木きの葉はに凝なぞらへた、色いろを合あはせて敷設しきまつけた堆うづたかい衾ふすまの中なかに、女をんなたちの姿すがたを寵こめて、黒髪くろがみの鬢まげの形かたちばかり見みえるのは、深ふかき溪河たにがはを包つゝんだ霧きりの上うへに、旭あさひに晴はるゝもみぢの枝えだに、瑠璃鳥るりてうの宿やどつた趣おもむきがある。壁かべも音おとなき金色こんじきの瀧たきであつた。

みな、寐ねぬくもりの、溶とろけたやうに、裙すそ、褙つまの音おともなく、聲こゑばかり、こんなことを、ふと言いふのを聞きいた。

「麓ちゃん、目がさめて居るのかい。」

と、お那々が呼んで、あゝ、と麓が言ふのに、

「何うしやうね。」

「なにをさ。」

「築地へ持つて行くものをさ。」

「然うねえ、何うしやう、私も困つたのよ。」

「困るわねえ。」

と、寢て居ると思つた野菊も、獨言のやうに言つた。

「あゝ、野菊ちゃん、眞個に困るわね。」

「何うしやう……」

其一は夜具の裡で、ぎよつとして小さく成つた。

「勘定がないのに相違ない。伯爵だと言つて

も養子である。然も遊びの金には、と昔から言ふの

である。築地へ持つて行くものに困ると言ふ、待合

へ拂ふべき遠出の心着を置かないで伯爵が遁げたと

思つた。其一は宿場で夜が明けた時のやう

な心地がした。何んとなく、聞こえよがしのやうで、

口を出したら、金子の相談をされはしないか

と……串戯を言つちやあ不可い——串戯

を言つちやあ不可い。

やがて朝酒の勢で、何か心配があんなさるやうだがと、言ひ出すと、三人ともけるりとして居る。不思議に思つて、あの先刻の、と其の事を訊くと、漸と思出して、お那々が氣もない顔して、

「……お土産に困るんですの、度々の事ですものね。何處から何を取寄せましてもね、いつもおなじやうなものはかりだものですから。」

其一は我折れた。腹の裡で、「チヨツ桁が違つたら。」

が、人間には浅ましいばかり意地がある。

女連は翌日又引返すまでも、午後には一度引揚げる事に相談した。

「貴方がお歸りだと困るわ、……お兄さんが入らしつて、どんなにお寂しいか知れないもの。」

こゝは、しかし、我慢にも、一所に引揚げねばならない場所を……昔冬木の若旦那は、

「まさか、汽車の切符を各自では買へなからう、女三人のと俺の分、皆……一等——」



其一は、のめ／＼と一人あとに残つたのである。  
此の一節は、くどいやうだけれど、御馳走の湯治に  
柄にもない、職過ぎた一等旅館に、渠が一人留まつ  
た事の説明である。

で、其一は、二座敷、据へつけの調度はもとより、  
女三人に對して、他所からもこゝへ運んだ、鏡臺の  
三臺ある中に、唯一人と成つて、妙に居残りのやう  
な氣がし出した。

柄は、早や相當でも、昔談の佐平治ほどの度胸は  
ない。

廊下を行き交ふ女中の聲音も、トン／＼と箆で突  
出すやうで、しかも今更急に歸るにも歸られない羽  
目に成つた。十分な居残り氣分で。

が、行燈部屋に閉籠められた次第ではない。出入  
りは自由だから、山道でも歩行かうか、で、すご／  
＼式墓へ出た時である。

其一は、とぼけたやうに目をこすつて見た。

もみぢの中に駕籠が三挺！

老軍人で、非職らしいが、將官以上らしく見える

のと、品の佳い其の老夫人と、不容色な大廂だが、装は絢爛たる、孫娘か、末の令嬢らしい妙齡のと、三人が出掛ける處で。

お艶が其の娘の駕籠に添つて立つて居た。

此の景色は一寸好い。

其一は、とぼけたやうに又目をこすつて見た。

「まあ、よくお似合ひなさいますこと　ー

ほん、ほんにお輕さんのやうでございますよ。」

トントン。

息杖が揃つて上つた。

此の景色は一寸好い。

「チヨツ。」

然るこ、其一は吐き出すやうに舌打した。

其の日、たそがれ頃、山道の古驛を緑温泉の方へ歸つて来る、其一は、瘦せた長い脛の尻端折で、帽子も被らず、利仁將軍の下男の自然薯に取憑かれたやうに、横長い汚い風呂敷包を首筋へ、縦に、順禮背負にして、枯枝の杖を支いて居た。が、草臥れた

體<sup>てい</sup>で、歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>くにも山<sup>やま</sup>家<sup>が</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>灯<sup>とも</sup>の軒<sup>のき</sup>へ寄<sup>よ</sup>つて辿<sup>たど</sup>  
る・・・・・と其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>、門<sup>かど</sup>背<sup>せ</sup>戸<sup>ど</sup>に生<sup>は</sup>へたコスモスも、  
佳<sup>い</sup>女<sup>をんな</sup>の順<sup>じゆん</sup>禮<sup>れい</sup>じみて、廂<sup>ひさし</sup>を借<sup>か</sup>りたさうな、秋<sup>あき</sup>のあは  
れ。

五

其の夜の眞夜中……丑満時である。

廣間の花電燈の下へ、鏡臺を三臺並べて、大肌

脱……だが、痩せて居るから、ひよろりとし

た半裸體の胡座になつて、蒼い顔して眞中の姿見を

見込むで居る。……金子が欲さに、何か、恚

うした勸喜天の咒法でもあるのであらうか……

凄いののは、老女の化粧ばかりではない。

成程、蒼いほど、満面に、塗つた。塗つた、・

……見ると、鏡臺に一壘づゝは備へつけの白粉を、

三個とも蓋を拂つてある。

のつぺらぼうと云ふ化物のやうな顔で、よろりと

立つと、違棚から蒔繪の硯箱を下ろして来て、引寄

せて、墨を摺りかけて、熟と其の硯を視た。

「おや。」

「おや。」「  
唇が黒いほどである。」

「おや／＼。」

硯は端州か、若州か、色紙形の青石であるが、梅  
の枝、梅の花が彫つてある。梅の中に、霞んだやう

な半輪の月が、石の肌理おのづから晴れて現はるゝ。  
其一は、慌てたらしく、組込を取つて、電燈に裏  
をすかすと、十二三の時、印刀で悪戯して、親父に  
叱られた彫りかけの、堀と云ふ、我が家の姓の形が  
見える。 . . . .

天麩羅の立食がしたさに、我が手で古道具屋へ賣  
りこかしたのが、さて、何處を何うめぐり廻つてか、  
こゝの高時繪に納つた。

ほろりと成つて、愁歎をしたらしかつたが、眉を  
ピリと、口をへの字に、目を半眼にしたのだから、  
涙を取次ぐのも馬鹿々々しい。

筆を嚙むと、墨をべつとりと、兩方の眉をぐいと  
引いた。其の白粉べたりの上へ、しかし白粉よりは  
墨の方が芬と薰つた。 . . . . 魔が魅すやうに寂  
然として居る。

割膝で、晩方背負つて来た包を解くと、柄絲のは  
づれた、朱鞘の大小、羊羹色の黒小袖、五分月代の  
ぼて鬘。 . . . . はゝあ、町まで下つて、田舎まは  
りの何かの一座に、一つ穴一つ鍋の、葱、豚の中か

ら借出したな！・・・此の位の衣裳小道具は、  
猿芝居でも持つて居る。

帯は兵子帯で間に合はせた。大小をつかみざしに、  
臍のあたりまで胸を開けて、ぐいと紋附の尻をから  
げると、塗つた上へ、胸にも足にも、べた／＼と兩  
手で揉んで、掌でのして、大根塗に足の裏までを塗  
り立てた。

すつくと立ち、ぎくりと頭を掉り、眉にびりりと  
稲妻で、姿見を覗込むでニヤリと笑ひ、押入から  
――蛇の目傘までは手が届かなかつたさうで  
――納屋を覗いて算段したらう、番傘を掴出し  
て、ト振つて、扱帯を入れたが、小脇に抱くと、肩  
もすばまる悄乎とした風采で、ぴた／＼と疊を傳つ  
て、二十五疊の片隅の、襖の中が、餘り客の氣のつ  
かない妙な處の階子段。・・・其の中へスポン  
と消えた。

青疊に残る、白粉のあし跡は、ほた／＼と霜を置  
いて、白いが、烏に化けさうである。

やがて、其の形は、消えたり、朦朧と現はれたり、

幽かすかになつたり、満山まんざんの露つゆが瀬せになるやうな湯ゆのしたゝ  
りに、蹻音あしおとも紛れつゝ、下したの廊下らうかを、左ひだりへ取つて、  
右みぎに曲つて、奥おくへ忍しのんだ。

二枚唐紙まいからかみの入口いりぐちは、お艶夫婦えんふうふ・・・・夫きつとは留守るす

――の閨ねやである。

片膝かたひざづきの肩かたの寄身よりみで、熟じつと・寢息ねいきを聞きいたつけ。  
すらりと開あけると、ひよいと入はひつた、――嘘うそで  
ない、壁かへから抜出ぬけだした趣おそむきで。

上下羽二重うへしたはぶたへの閨ねやは、客きやくの美女びぢよのよりは媚なまめかしい。

――枕頭ちんとうの殘燈ありあけは、亭主ていしゆの好きすな電燈入でんとういりの籠燈かごとう

臺だい。

圓鬘まるまげの艶つやも濡色ぬれいろの、寢ねしなの湯ゆのぬくもりは、ほ  
んのりと、白しろい額ひたひに霞かすんで、吉野紙よしのがみに包つまれた寐顔ねがほ  
の生際はへぎは。

密そつと視みて、ばつさり開ひらくと、傘からかさを片手かたてに、天井てんじやうざ  
しに其その寐顔ねがほへ翳かざして、もろ脛すねにぬツくと立たつたが、  
寢入ねいりばなと見みえて、すやノゝと・・・・寐息ねいきも羽はぶ  
二重たへ。ザラリと引ひ抜きく鑄刀さびがたな、ひたノゝと、お艶えんの頬ほ  
を敲たいた。

「おい／＼、親仁どん／＼。」

衾を下から翻したやうに、ハツと起きた。小膝の雪、コスモスそよぐ褸の亂れ、引合はす手は伊達巻に近づて、寢衣の襟はわな／＼と浪を打つ。縞お召にかさねた白地の浴衣は、顔の色ともに颯と蒼白い。其一は頭をギクリと掉つて、眉をびり／＼の、番傘をぐるりと廻はして、

「おい、・・・何と見える。」

と、目前へづい大刀を突出した。

「ー　こゝで定九郎に見える、と言はせて、キヤツと笑つて、猿が化けたやうに二階へ飛んで遁げるつもりだつたさうである。　ー　（誰にでもお輕さんと言ふ、空世辭が癩に障つた爲に）

唯、お艶はたゞ、

「あ、あ、あ、あ。」

とばかり、それもたゞ唇がゆれて、幽に皓齒が動くばかり。目も恍惚と成つて、秘さうとする手が胸の上へ、且ふつくりと、乳を重ねてわな／＼のである。

「やい、女、



と一つ氣取つて、

「此方へ參れ。」

と背後状に、出ながら繰引に引く、目の前の切尖に連れて、人魚の釣られたやうに、お艶は、袖も棲も、ぞろりと藻抜けに、ふわりと立つた。

「參れ、參れ！」

「は、はい。」

と圓鬘がゆら／＼として、廊下をふら／＼と跟いて来る。白脛より、腕より、時々見送つてギクリと見る目の惱しさは、脇明をこぼれて覗く膚で・・・衣と、肉との間に、さまよふ、其が、夢の姿、魂の形代に震へて居る。

しかし、其一は持餘した。

行く處がない。

温泉の浴客であるから、――湯殿へ来た。

硝子戸の外に、秋の夜の冴え渡るやうな板敷へ入つて、五六つ並んだ洗面臺の縁へ、うしろに清水の点滴を聞きつゝ、悪浪人の繪模様、白塗の脛を片脚、上あぐらに、ぐいと掛けた。

同時に頭をくひ反らし、刀の切尖を、ずかりと柄

おとしに床についで、

「坐れ。」

「は……い。」

ここで、遁げ出さうと、身構へながら、小さな聲で、

「女、身ぐるみ脱げ。」

と言つた。

魔法で、のろひ出した仙女の如く、艶麗に手足を束ねて跪く、白身のお艶を前にして、其一は弱つた。……仕方がないから、

「湯にでもお入り。」

と云つて、呵々と笑つた。

が、夢遊病者の如く、其のまゝすつと戸を開けると、湯氣に背筋が白みつゝ、腰を落した、湯槽の音。……お艶の身を装つたやうな麁の香をきくと、其一はふけを雀るやうに黦たび頭を掻きながら、黒羽二重の裙をおろした。……が帯を解いた。さながら其の状は、血の池を覗く青鬼であつた。

翌、正午前、挽物細工の店をひやかして、其一が  
歸ると、又玄關前に駕籠が二挺。看護婦のやうな附  
添の女と、一人は、法體の女隠居が、乗つて出やう  
とする處。

お艶が帯の柳腰で、其の、然も隠居の駕籠に添つ  
てゐんだ。をくれ毛を搔きながら、

「まあ、よくお似合ひなさいましたこと　ー

ほゝゝ、ほんにお輕さん．．．．．」

此の景色は一寸．．．．．其の

途端に、其一が、門際に掃除をしかけの竹箒を押  
取つて、十間ばかり離れながら、大刀づきにぐいと  
出して、頭をギクリと掉ると、くるりと捲つて尻を  
端折つた。

唯、お艶が見て、熟と瞳を大きくしたが、燃ゆる  
やうに、ぽつと睨を赤めた。

箒を土へトンとつくと、お艶　ー　昨夜其の白  
身を剽盗された　ー　お艶は、べた／＼と秋草に、  
露も友染も亂れつゝ．．．．．

0

【完】